

明治期東奥義塾関連洋書についての考察

— ジョン・イング寄贈書を中心に —

北 原 かな子

はじめに一洋学教育の中心であった洋書—

津軽地方において洋書が使われるようになったのは弘前藩時代にさかのぼる。蘭学から英学への移行期にあった幕末期には、藩士が洋書で学べるよう、弘前藩では種々の努力を行なった。明治に入ってもそれは継続し、慶應年間から明治3年にかけて「万国史」や「地理書」、「ウェブストル氏中辞書」などさまざまな洋書を購入した様子が、坂井達郎によって明らかにされている。⁽¹⁾

これに続いて明治5年(1872)11月に津軽地方弘前に設立された東奥義塾でも、草創期から外国人教師を招聘し、洋書中心の教育を行なった。明治10年にアメリカ・インディアナ州のインディアナ・アズベリー大学に留学した東奥義塾生たちは、同大学予備課程とほぼ同水準の洋書をテキストとして学んでおり、入学後も現地の学生になんら引けを取ることもない水準に達していた。⁽²⁾ さらに洋書中心の教育は明治20年代になっても続いた。この当時は条約改正が論議されているときであり、内外雑居にそなえて英語への関心が全国的に高まった時期でもある。また、特に20年代初頭は未だに日本語のテキストがそろわないことや、新しい知識を輸入教科書で学ぼうとする動きが全国的に強かった時期で、東奥義塾もその中に入っていた。ここでは小学校を終えたばかりの生徒たちが、様々な教科を英語の原書で学ぶことになり、それは時にかなり厳しい経験となるケースもあったようである。⁽³⁾ 明治20年代から30年代にかけては一般に洋書から日本語の教科書への移行期にあたるが、東奥義塾ではそのまま洋書中心の教育を行なった。明治29年3月まで同校に在籍した浅田良逸は、数学から経済学まで諸教科を原書で学んだため、東京の学校に進学したとき、苦勞したことを伝えている。原書だけで学んだため知識は原語のみであり、日本語で書けなかったからである。⁽⁴⁾

こうした東奥義塾教育の中核であった洋書は、現在でもきわめて良好な状態で残されており、これまですでに数度にわたって調査が行われている。しかし、現存する洋書の全容が明らかになっても、それらが具体的にどのように東奥義塾教育や津軽地方にかかわったのかについては、これまでほとんど考察されてこなかった。本稿では、これまでの調査結果をふまえ、明治期東奥義塾に関連する洋書のうち、弘前藩時代の購入本や、草創期東奥義塾に大きな影響を与えたとされる、東奥義塾三代目外国人教師ジョン・イング⁽⁵⁾の寄贈書など、当時の英学を知るうえで重要と思われるものを取上げ、時代の状況も視野に入れつつ、地方の近代化との関連を考察する。

1. 現存する東奥義塾関連洋書の全体像

津軽地方の洋書について述べる前に、いくつかの言葉を定義しておきたい。前述のように弘前藩時

代からすでに洋書は購入されていた。このうちの多くは藩や藩学校が解体した後もそのまま、実質的に藩学校を継承して設立された東奥義塾に受け継がれたと見受けられる。現在、これらの洋書類は、現在東奥義塾高等学校と弘前市立図書館の二ヶ所に分かれて保管され、内部に東奥義塾に所蔵されていたことを示すなんらかの蔵書印がおされている。そこで、これらの本全体を「東奥義塾関連洋書」、その内の東奥義塾高等学校所蔵本を「東奥義塾本」、弘前市立図書館所蔵本を「弘前図書館本」とする。

東奥義塾関連洋書についての本格的調査は、1963年の池田哲郎によるものが最初である。⁽⁶⁾池田は、全国の洋学校所蔵洋書調査の一環として東奥義塾関連洋書の調査を行ない、1880年以前発行の洋書約100冊を紹介するとともに、その所蔵状況について高く評価した。その後さらに、以前東奥義塾で使用され、個人で所蔵されていた洋書が東奥義塾に返還されるなど、所蔵状況にいくらかの変化があったことから、筆者は1994年から1996年にかけて、再度東奥義塾本の調査を行なった。⁽⁷⁾さらに、そのとき確認できなかった弘前図書館本も2004年夏に調査の機会を得ることができ、現状での全体像をつかむことが可能になった。東奥義塾本、弘前図書館本共に、調査結果をまとめる際に、十進法分類を念頭に置きつつ実態に合わせた18項目を設定した。それぞれの項目と東奥義塾本、弘前図書館本を合わせた冊数は以下のようになる。⁽⁸⁾

①百科事典・年鑑、32冊 ②哲学・心理学・倫理学、8冊 ③宗教、24冊 ④歴史・伝記、33冊
⑤地理・紀行、7冊 ⑥政治・法律・経済、41冊 ⑦軍事、1冊 ⑧数学、26冊 ⑨理学、23冊 ⑩
医学、5冊 ⑪工学、3冊 ⑫農林業、1冊 ⑬芸術、1冊 ⑭辞典、9冊 ⑮文法、4冊 ⑯作文、
11冊 ⑰読本、5冊 ⑱文学、33冊（計267冊）⁽⁹⁾

幕末から明治にかけて使用された原書が、これですべてとはかぎらないが、現在残っている本を見れば、政治経済関係が多いことが分かる。また、中にはミッチェルの地理書、パーレーの万国史など、もともと福沢諭吉がアメリカで購入して慶応義塾で教科書として使用したことから全国に広まった、いわゆる全国流布本も一通り入っている。さらにこの中には東奥義塾から留学生を送り出した頃のインディアナ・アズベリー大学で教科書として使用されたものと同じ本も含まれていて、当時の東奥義塾の英学が比較的高い水準になっていたことを示している。⁽¹⁰⁾

本の保管状況は、前述したように全体的に良好である。ただし、旧藩学校時代に購入したと思われる書籍は、何冊かひどくいたんでおり、中には一度本を解体して再製本したと思われるものもある。明治の始めから弘前で英学を学んだ岩川友太郎が、本が不足しているためばらばらにして皆で勉強したことを伝えているが、そうした形跡を残しているものと思われる。⁽¹¹⁾

2. 蔵書印と寄贈サイン

これらの洋書のうち、購入経路が明確なものは少ない。手がかりになるのは蔵書印と寄贈サインで

ある。寄贈サインの方は、誰の本であったのかが明確である。東奥義塾に本を寄贈した人のうち、冊数や影響力で重要と思われるのは明治7年末に着任したイング、明治10年の最初のアメリカ留学生の川村敬三、イングの後任で明治12年着任の外国人教師カールの3人である。このうち、イングの寄贈書はこの地方の近代化との関連において興味深いものと思われるので、後述する。

東奥義塾本の蔵書印は、明らかに大正期の再興後のものと見受けられる印を除くと、①稽古館蔵、②弘前学問所、③弘前藩学校、④弘前蔵書、⑤青森学校、⑥青森県文庫印、⑦東奥義塾蔵書之印、⑧三十二年改、⑨東奥義塾蔵、⑩十二支印、⑪川村敬三寄贈印の11種類である。これに、弘前図書館本に見受けられる⑫市立弘前中学東奥義塾図書館蔵、⑬青森県弘前市立弘前図書館の二つの印が加わる。このうち、⑧三十二年改と⑦東奥義塾蔵書之印は、東奥義塾本のほぼすべての本についている。弘前図書館本の場合は、⑧三十二年改と⑦東奥義塾蔵書之印が付いている本と、⑫市立弘前中学東奥義塾図書館蔵、⑬青森県弘前市立弘前図書館のいずれかが付いている本に分けられ、同じ本の中に⑧三十二年改及び⑦東奥義塾蔵書之印と⑫市立弘前中学東奥義塾図書館蔵の印が押されていることはない。そのため、⑧三十二年改の印は、明治33年の私立から市立への移行期にあたって所蔵を確認した印ではないかと推察される。従って、この⑧三十二年改印が付いているものは、私立時代の蔵書であり、ついていないものがその後の購入であったと考えられる。

以上の蔵書印のうち、本を活用した経路を推し量る手がかりになるのは、①稽古館蔵、②弘前学問所、③弘前藩学校、④弘前蔵書、⑤青森学校、⑥青森県文庫印、⑩十二支印だが、そのうち、①稽古館蔵、②弘前学問所の印が押されているのはほとんど蘭書である。こうした弘前藩時代からの印が押されている一つのケースとして、弘前図書館本の中の「コーネルの地理書」を例にとってみる。同書には③弘前藩学校、⑤青森学校、⑥青森県文庫印、⑦東奥義塾蔵書之印、⑧三十二年改が押印されており、この本のたどったルートが鮮やかに描き出されている。すなわち、旧弘前藩学校時代に購入され、おそらく明治4年1月の弘前の敬応書院及び青森英学校開設時に青森の英学校に所有が移り、更に県の所有を経て東奥義塾に戻ったものと推察される。この本も前述の全国流布本の一つであり、弘前藩学校時代にすでに弘前藩でこうした本を購入していたことを示す物的証拠⁽¹²⁾ともなっている。ただこうして本のルートが推測できるものは少なく、旧藩学校時代の所蔵を示す蔵書印があるのは、蘭書も含めた全体でわずか21冊にすぎない。⁽¹³⁾

では次に、これらの書籍の中から、この地方の近代を考えるに当たって興味深いと思われる書籍について考えていきたい。

3. 旧藩学校時代の購入洋書が伝える洋学

(1) パーレーの万国史

旧藩学校時代の蔵書印を持つ洋書の中で、明治前期の女子教育との関連で興味深いのが、弘前図書館本の中のパーレーの万国史 (*Peter Parley's Universal History, on the basis of geography*, New York: Ivison, Blakeman, Taylor & Co., 1870) である。

慶応義塾から広がった全国流布本の一つであるこのパーレーの万国史は、言うまでもなく明治期洋学の中で、全国的に非常に多く使用されたものである。英語力を推し量る指標とされ、三宅雪嶺、長谷川如是閑など、多くの知識人たちにも影響を与えた。もともと作者がよくわからず、タイトルに付いているピーター・パーレーなる人物の作とされたり、本を刊行したグードリッチの著作とされたりするなどの混乱があったが、昭和に入ってから緋文字などの著作で知られる文豪ナサニエル・ホーソン（Nathaniel Hawthorne, 1804-1864）の若き日の匿名による著作であることが知られるようになった。⁽¹⁴⁾

東奥義塾との関連で見ると、『東奥義塾再興十年史』に掲載されている「東奥義塾課程」の下等中学科の部分に「ペアレー万国史」の名前が見いだせるが、それ以外は、明治6年のカリキュラムの中にも「万国史」とあるのみで、著者名が不明である。従って、たとえば「スウイントンの万国史」など類似したタイトルを持つ書籍がいくつかある中で、同書がどのくらい教科書として使われたのかは、よくわからない。

今回、弘前市立図書館を調査した際、パーレーの万国史を見いだすことができた。しかし興味深いのは、この本に一つも東奥義塾の蔵書印がないことである。⁽¹⁴⁾弘前蔵書印と⁽¹⁵⁾十二支印（辛未改）があるため、旧弘前藩時代の購入と推察されるが、東奥義塾で使われなかった可能性は高く、東奥義塾開学後、同校とは別の場所でこの書籍がどのようにして今に伝えられたのか、不明である。ただ、この本の存在は、旧弘前藩校の体制をほぼ引き継ぐ形で造られた東奥義塾に、全ての本が残ったわけではなく、東奥義塾以外の場所で何らかの形で使われるという、従来考えられていたのとは別の洋書ルートが存在する可能性を示しているものと考えられる。

さらに、このパーレーの万国史に関連してきわめて興味深いのは、弘前女学校開校時に教師であった、成田らくの残した学習ノートと内容が一致することである。次に、このことについて述べる。

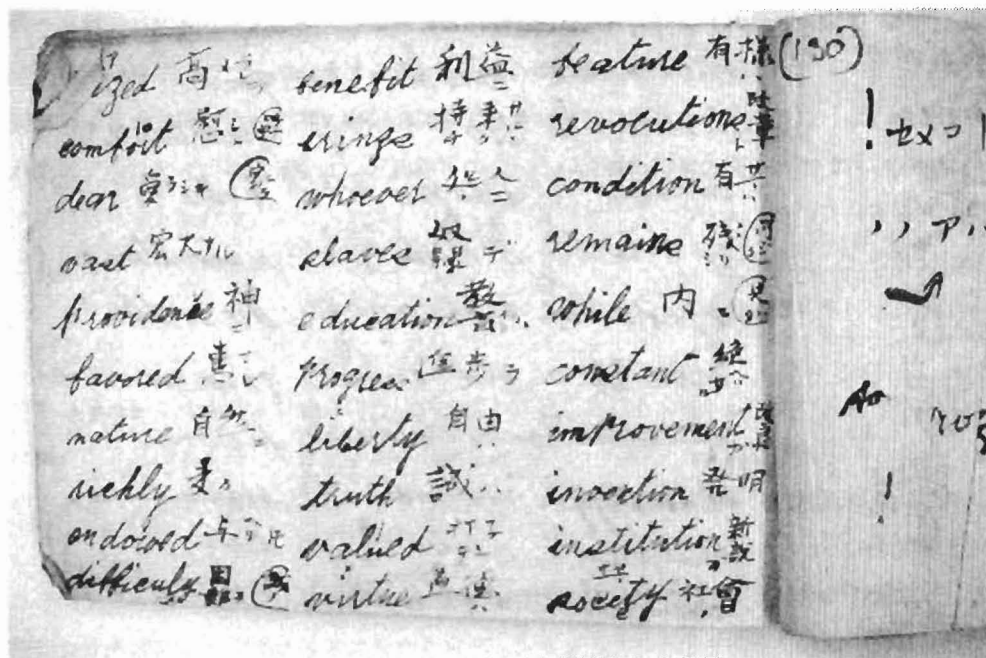
（２）『万国史』と成田らくのノート

成田らく（1870-1945）は、旧弘前藩士成田茂の長女として西津軽郡山田村に生まれた女性である。明治10（1877）年1月から15年9月まで山田小学校、明治18（1885）年3月から5月まで青森県立女子師範学校で学んだ。小学校在学中はきわめて成績優秀につき、何度も表彰され、賞与としての書籍を得ている。⁽¹⁵⁾明治20（1887）年9月に、弘前女学校の前身である弘前遺愛女学校に就職、明治22年の弘前女学校開校後も同校で教鞭を取った。明治22（1889）年12月16日時点の職員表で校長長谷川誠三、⁽¹⁶⁾副教頭本多テイの次に名前が記載されている。同校離職日時は不明だが、駐米大使として高名だった珍田捨己の弟、珍田正雄と結婚し、その後は家庭で家事と子育てに専念した。東奥日報で健筆を振った成田鉄四郎は叔父にあたる。

成田らくは、山田小学校在学中から弘前女学校教師時代にかけての学習帳を残している。その内容は算数、物理、英語、歴史、作文、小学女礼式、教育指導法などで、当時の学習方法を伝える史料となっている。⁽¹⁷⁾中でも本稿の内容との関連で注目に値するのは、英語の練習帳である。

成田らくのノートのうち、英語に関連するのは9冊あり、内容はほとんど単語帳である。表紙から

判断して、世界史関係の本に関するものと思われるのが、3冊残っている。それぞれ表紙に、「first The glossary of Universal history, Raku Narida」(最初の万国史の単語帳、ラク、ナリタ)、「The glossary of universal history, Raku Narita」(万国史の単語帳、ラク、ナリタ)、「The glossary of universal history, R. Narita」(万国史の単語帳、R. ナリタ)とある。このうち、「The glossary of universal history, Raku Narita」の130と記されている頁と、パーレーの万国史130頁を比較してみると、両者の内容が一致し、この「Universal History」関係のノートが、パーレーの万国史を学んだときに作成されたということが明らかになる。らくのノートの該当部分の写真と、パーレーの万国史130頁の該当部分の抜き書きを以下に掲げる。



8. The most remarkable feature in the history of Asia is, that while the country has seen many revolutions and changes, the condition of the people remains nearly the same. In our country and in Europe, there is a constant improvement. Every year brings some new art, invention, or institution, for the benefit of society.

9. But in Asia it is not so. Whoever is king, the people are but slaves. Education makes no progress, liberty is unknown, truth is little valued, virtue is not prized, and that thing which we call comfort, and which makes our homes so dear to us, is not to be found in this vast country, so favored by Providence, and so richly endowed by nature.

上記の英文中、下線部分が、らくのノートに抜き書きされている単語である。ノートと照合すると、左から右に英語を横書きする現代と違って、単語を縦に上から下へ、さらに右の行から左の行へと書き進んだことがわかる。さらに、本の内容との関連から判断して、3冊中最後に作成されたと見られる「The glossary of universal history, R. Narita」の最終頁に、「明治二十年 萬國史字留 成田良久 十一月二九日」と記載されていることから、これらのノートが明治20年のものと判断できる。成田らくは、前述の通り明治20（1887）年9月に弘前遺愛女学校に就職していることから、同校の教師時代に学習したものと思われる。

この弘前遺愛女学校とは、前年弘前教会内に造られた来徳女学校が函館遺愛女学校の分校という形をとったときの学校である。ただ、その後の弘前女学校時代とはちがい、教育体制などの詳細は不明である。当時、実際に校務運営に当たった山鹿元次郎の記述には、明治19年11月頃に、費用の大部分と学校経営を主としてメソジスト派婦人宣教師の監督を受けるようになったことから弘前遺愛女学校と名称が変わったことと、それ以前の明治19年6月開校の来徳女学校当時の教育内容が、裁縫や読み書きを学ぶくらいだったことが記されている。⁽¹⁸⁾ この学校経営の大半を担ったメソジスト派女性宣教師文書に掲載されているヒューエットの報告書でも、当時の同校に外国人女性宣教師が常駐していないことが記載され、⁽¹⁹⁾ したがって、パーレーの万国史を原語で学んだ当時の成田らくが外国人女性宣教師から学んだという可能性は少ない。おそらく弘前遺愛女学校の教育とは別の枠で学んだものと思われる。

どのようないきさつで、誰の教えを受ける形で成田らくがこの本を学んだのか不明だが、少なくともこのパーレーの万国史と成田らくのノートは、弘前藩校時代の洋書が、東奥義塾以外でも使われており、さらに東奥義塾の男子生徒だけではなく、東奥義塾外で、女性も洋書で学んでいた事実を今に伝えるものであろう。

なお、弘前遺愛女学校は明治22年6月に県内初の本格的な女学校である弘前女学校として開校した。同校では、本科の課程に英語を週6時間割りあて、アメリカ人女性宣教師による英語教育を展開した。⁽²⁰⁾ 2年次のカリキュラムには、英語の時間に「作文会話」と並んで「萬國史之類」と記され、さらに、教科用図書として、スウィントンの萬國史などがあげられている。⁽²¹⁾ らくの同僚であった海野ヨネも英語によく通じた女性だった。⁽²²⁾ 成田らくの「萬國史」についての学習も、何らかの形で生きた可能性は十分にあるだろう。公立の高等女学校教育体制が整う前の弘前における、近代化へ向けた一つの側面を伝えるものと思われる。

4. ジョン・イングの寄贈書

（1）イングの寄贈書一覧

次にこの地方の近代を考えるうえで重要と思われるのは、ジョン・イングの寄贈書である。東奥義塾本と弘前図書館本の調査の結果、イングの寄贈書と判断できるのは次にあげる8冊である。

1. Coppee, Henry *Elements of Rhetoric; Designed as a Manual of Instruction*, E. H. Butler & Co.

USA, 1860, 384p.

2. Cushing, Luther S. *Rules of Proceeding and Debate in Deliberative Assemblies*, Taggard & Thompson USA, 1867, 189p.

3. Dana, James Dwight. Aided by George Jarvis Brush *Descriptive Mineralogy, Comprising the Most Recent Discoveries*, John Wiley & Son USA, 1875, 827+64p.

4. Hiatt, J. M. *The Political Manual, Comprising Numerous Important Documents Connected with the Political History of America*, Asher & Adams USA, 1864, 306p.

5. Liddell, Henry G. *History of Rome, from the Earliest Times to the Establishment of the Empire*, Harper & Brothers, 1865, 768p.

6. Schwegler, Albert., trans. Julius H. Seelye *A History of Philosophy in Epitome*, D. Appleton and Company, 1866, 365p.

7. Scott, Colonel H. L. *Military Dictionary: Comprising Technical Definitions*, Trubner & Co., 1862, 674p.

8. Sheppard, Furman *The Constitutional Text-Book: A Practical and Familiar Exposition of the Constitution of the United States*, George W. Childs, 1865, 324p.

以上のうち、1の修辞学の本と6の哲学の本は、それぞれ1864年と1867年のインディアナ・アズベリー大学での教科書であり、イング自身が学んだものと思われる⁽²³⁾。また、3の地質学の本は発行年が1875年であきらかにイングが弘前滞在中に取寄せたものと判断でき、東奥義塾関連洋書の中では重要なものであるが、当時の地質学をめぐる状況と関連して、すでに拙著の中で言及したのでここでは省略する。ただ、後述の内容との関連で、イング夫妻が明治9年6月17日に、後に明治14年から15年にかけておきた弘前事件で東奥義塾関係者と対立することになる大道寺繁禎等と共に地質調査に向かうなど、単なる東奥義塾教師という枠を越えて、地域の人々と協力した活動を行っていたことを指摘するにとどめる。⁽²⁵⁾

イング寄贈書で、これまで若干でも言及されてきた以上の3冊を除く残りの5冊中、5のローマ史、7の軍事関係事典を除く3冊は、議事関係の書籍である。ここで、イングが残した議事関係の本のうち、2のクシング、8のシェパードの本について、以下に取上げる。

(2)「クシング氏議事定則」と「シッパード・米国政署」

東奥義塾に「クシング氏議事定則」として残されていたこの本の、目次内容は以下のようなものである。

はじめに

第一章 予備的内容について（定足数、議会の規則、期間、議事決定原理）

第二章 役割分担（議長、書記）

第三章 メンバーの権利と義務

第四章 運営についてのイントロダクション

- 第五章 一般動議
- 第六章 否決（先決問題、延期）
- 第七章 延長の動議
- 第八章 動議の付託
- 第九章 修正動議
- 第十章 議題の一連の順序（優先審議事項、付随審議事項、補足審議事項）
- 第十一章 議事の秩序
- 第十二章 討論の秩序
- 第十三章 質問について
- 第十四章 再審について
- 第十五章 委員会について
- おわりに

どのような集団であれ、審議するとは、適切な方法を用いておこなわれるべきであり、その結果はその集団の総意を示すものであるという内容から始まるこの本は、上記の目次からも分かる通り、議事運営の方法を詳しく書いたものである。十九世紀後半のアメリカで、広く用いられた本であった。著者のクシング（1803－1856）は、ハーバード大学のロースクール出身で、ボストンで法律関係の雑誌の編集や下院の職員を務めた後、1844年に州議会の議員となり、またボストンで民事訴訟に携わったりした。1848年から亡くなるまではハーバードのロースクールでローマ法も教え、1850年からは、最高裁での裁判記録を取りまとめる仕事もおこなった。上記の本は、クシングの代表作で、これによって彼はたちまち議事運営方法の権威と見なされるようになっている。⁽²⁶⁾

また、「シッパード米国政署」として東奥義塾に保管されていたシェパードの本の目次内容は以下の通りである。

- 第一章 北アメリカの植民地におけるセツルメントの発見
- 第二章 「連合」について
- 第三章 憲法の適用
- 第四章 序文—法権力の分割—下院
- 第五章 上院
- 第六章 上院と下院の適切な分割
- 第七章 立法
- 第八章 議会の権限
- 第九章 議会の権限の制約
- 第十章 上院の権限の製菓
- 第十一章 行政の権限

第十二章 行政の各部局

第十三章 司法の権限

第十四章 さまざまな規定

第十五章 憲法改正—将来的な、さまざまな規定

第十六章 憲法とその改正についての追加事項、権利の主張、独立宣言、連合についての記事、ワシントンの演説、試験のための質問事項、インデックス

シェパードの本は、歴史をふまえながら、アメリカでの法体制と立法・司法・行政の三権のあり方について書かれたものである。主に学校で使われることを念頭に執筆され、分かり易い記述であると共に、巻末に試験用の問題集も付いていて、独学も可能な本となっている。著者シェパード（1823—？）は、プリンストン大学で法律を学んだ人物で、1848年にフィラデルフィアで弁護士となった。1868—71、1874—77の間は検察官も努めたが、その間、刑事事件の迅速な解決に取り組んだことで知られる。⁽²⁷⁾ 上記の本は、シェパードの代表作となっている。

以上の本の目次内容が示す通り、イングが東奥義塾に残した本は、議会や議事進行方法、法律に関するものである。現在わかっている範囲では、全国の明治初期洋学校関係の洋書にこれらの本の類書はきわめて少なく、少なくとも池田哲郎が全国の洋書を調査したときの記録には、同名の書籍は見当たらない。⁽²⁸⁾ ただ、興味深いのは札幌農学校の農学校文庫の中に、シェパードの本が一冊、クシングの本が二冊、残されていることである。⁽²⁹⁾ この場合、シェパードの本は、タイトルは同名だが1855年版で、出版社は別である。クシングの本もタイトルは同名でも、一つは1860年版、もう一冊は1869年版で、1869年版の方は出版社も別となっている。両冊とも広く用いられ、数度にわたって版を重ねていることも一因と思われる。

このように草創期東奥義塾の学生たちに多大な影響を与えたとされるジョン・イングが残した中には、議会や議事運営の方法について具体的に詳述したものが含まれていた。イングの場合、購入したと思われる日付を本に記入することが多く、シェパードの本は1868年3月23日、クシングの本は、1868年3月26日となっている。イングが中国や日本に宣教に赴く前に購入したことは確実である。イングは1870年に夫人とともに宣教のため中国に渡り、1874年に日本に来ているが、その間母国には帰っていない。これらの書籍をその間持ち歩いたものなのか、東奥義塾に来てから、何らかの理由で母国から送らせたものなのか、その辺の経緯は不明だが、前掲のイング寄贈書の中の3. にあげた地学の本のように、これらの議事法の本もイングが弘前滞在中、わざわざ寄せた可能性は否定できない。いずれにしても、寄贈していったということは、それなりに何らかの必要性があったものと考えられる。なぜこれらの本が必要とされたのか、次に、当時の弘前を取り巻く背景について言及する。

（3）当時の東奥義塾を巡る時代背景

周知の通り明治初年は、日本の政治体制が激変した時期である。特に、明治11年の三新法発布により、各府県、町村でも選挙や議会が行われるようになった。青森県でも、1879年3月に初の県会が開

催され、また町村会規則が定められた。⁽³⁰⁾しかし、現実には県会レベルであっても、「議場ニ在テ審議討論スルノ際絶テ異論一動議モ発スルナク、默然」⁽³¹⁾としているような状況であった。町会レベルともなると、「[町村会規則の] 総則選挙議則等ノ趣旨ヲ了認シテ之ヲ履行スルヲ得ルモノ幾人ナルヤ、ソノ趣旨ヲ了認スルヤ了認セサルハ姑ラク後ニシテ之ヲ読ミ得ルモノ幾人ナルヤ」⁽³²⁾という状態であり、県会なり町会なりの趣旨を理解したうえでの活発な議論が行われるにはほど遠かった。この状況について、疑念を表明する議論も噴出した。特に東奥義塾から刊行されていた『開文雑誌』5号には、参政の権利行使が東洋諸国で初の快挙であるにもかかわらず、議論が低調なままでは、国会も危ぶまれるとの危機感が表明されている。⁽³³⁾すなわち、維新前までとは全く異なった参政のあり方が求められるようになった時代でもあった。また国会開設に関する運動も活発化した。

こうした時代背景の中で、東奥義塾は、津軽地方のみならず青森県内の自由民権運動をはじめとした政治思想活動の拠点となったことは、この地方の近代史ではよく知られている。ただ、具体的活動の様子や雰囲気伝える資料はそれほど多くない。その中であって現在デポー大学に残っている笹森卯一郎の文章は生の雰囲気を伝えるものとして興味深い。彼は、留学中に学校の機関誌に書いた日本の議会制度に関する文章の中で、次のように語っている。

ここで私は、自分の少年時代の思い出を、感傷とともに語らずにはいられません。私たちの地方の指導的立場に在る人たちが集って遊説について話しあうという会議がありました。私の父は議長で本多氏が副議長です。ある日の夕方、私の父は私を会議に連れていってくれました。私は、私たちの国でよくやることですが、片手に提灯を持ち、もう一方の手で父の手を握っていました。私はその時13才でした。いったいどんな風に議事が進められるのか、その時の私はまったく分かっておりませんでした。

でも、私がその会議の話し合いの目的であった、すばらしい名前を耳にしたとき—それは有史以来何万人もの人々がそのために傷つき命さへ捧げた気高いものであり、アメリカ独立の父達が彼らの尊い血を流し、そして偉大なるアメリカがその上に寄って立つという、いわゆる立憲の自由のことだったのですが、私の胸は喜びと誇らしさと希望で高まり、あつまった人たちの燃え上がるような興奮の渦につつまれました。これこそが、その会議において、私が先に述べたような⁽³⁴⁾請願をすることを決定した夜だったのです。

『青森県総覧』の中に、国会開設運動の一環として1880年1月に「各有志会合を弘前に催し、県下の遊説を可決した」⁽³⁵⁾とあり、おそらくその時のことと思われる。卯一郎の父笹森要蔵が議長で本多庸一が副議長を務めたという事実や、会合での高揚した様子などを具体的に伝えるものとしてこの記述は興味深いものである。やはり『青森県総覧』によると、「先づ檄文を飛ばして其の運動の主旨を説明し、委員を派出して賛成を募らしめた」⁽³⁶⁾が、その檄文は、同年2月に出された。当時の東奥義塾の様子は、明治12年6月から一年間在職していたアメリカ人教師のカールによっても伝えられている。カ

ールは、明治13年2月には、教師たちが政治集会を開いていることや、時にはまるで革命でも起きるかのように激論が戦わされていると驚き、翌月には、日本人は興奮しやすく、トラブルが起きるのではないかと、さらに続く激論の行方を心配した⁽³⁷⁾。

こうして、文字通り東奥義塾の関係者が中心となつての国会開設への動きは、おのずと国会の具体的なあり方としての議事運営方法への関心へとつながったものと思われる。『東奥義塾再興十年史』には次のように書かれている。

此時義塾の教師學生は單に國會開設の事計りでなく地方町村自治体の設立改良にも意を注ぎ議事法等をも互いに研究し曉通して居った為⁽³⁸⁾に後縣會町村會等開かるるに至り、未だ議會の何物たるかをすら解せざる者のみ多かつた時代とて義塾関係者は概ね縣會町村會の議長又は議員に擧げられ先覺者として大いに自治の為に貢獻する所があつたのである。

また、明治13年当時東奥義塾の教師であつた外崎覺の言葉を借りると、「町村制が發布されたところで、多数決といへばなんのこともか、過半数といへばなんのこともか、投票はどうしてするものか、てんでわからない連中が多い、それが皆塾へ講習を受けに來た⁽³⁹⁾」という状態でもあつた。前述した通り、東奥義塾が国会開設運動の拠点であつたことはよく語られることだが、単に活動の中心というだけではなく、いわゆる議会というもののへの対応が求められる時代においての、概念や関連知識を学ぶ「知の拠点」であつたことは、当時の津軽地方の状況を鑑みたときに重要であろう。ではその知識とはどこから來たか、東奥義塾関係者は何をもって議事法を研究したのかと問うとき、本稿で紹介したイングの寄贈書というのは、大きな意味を持つてくるとされる。イングが、議事の運営方法（パリアメンタリー・ロオ）を東奥義塾で教えていたことは、山鹿旗之進が書き残しているが、クシング、シェパードの本は、それを裏付けるとともに、国会開設運動などの政治運動が活発化した背景の一つにある、西欧型知識導入者としてのイングの存在を浮かび上がらせるものと考えられる。

さらに、こうしたイングの教えというのは、東奥義塾の枠を越えた影響力を持ったことも見逃せない。明治13年2月6日付の『青森新聞』では、旧斗南藩士であつた小川渉が政治や選挙方法、それに対する心構えをイングを通して教わつたとして、米国の青年たちのあり方を見習つて、もっと学ばなければならぬと訴えたことが報じられている⁽⁴¹⁾。

小川渉とジョン・イングが具体的にどのような接触があつたかは不明であるにしても、イングの言葉を伝えるという形で、青森県民の政治意識の覚醒を訴える記事が掲載されるということ自体が重要であろう。この地方でのイングの存在感を暗示するもう一つの例として、笹森儀助の存在もあげられる。明治9年当時、現在の下北地方である六大区の区長だつた笹森儀助は「重複選挙法」を実施したが、その考え方や知識を彼は「洋学者」から聞いたとしている⁽⁴²⁾。この「重複選挙法」とは、選挙を経て選出された議員の互選でさらに議長を選ぶということであり、現在でいう所の議事運営法に近い。その内容を誰から学んだのかも興味深い問題である。幕末からこの時期に至るまで、国内遊学した人

物の中に政治経済を学んだ者は見当たらず、笹森儀助自身が遊学していない状況を鑑みると、ここで「洋学者」となる人物は限られてくると思われる。

笹森儀助が盟友であった大道寺繁禎と共に、明治14年から15年にかけて起きた弘前事件で東奥義塾関係者と厳しい対立関係にあったことは、この地方の近代史の中ではよく知られていることである。しかし、儀助と「洋学者」とのつながりを問うとき、たとえば同じイング寄贈である地学の本に関連しても、前述したような、明治9年に大道寺繁禎がイング夫妻と共に地質調査に赴いたという事実も思い起こされる。仮に弘前事件では対立する側にあったとしても、明治10年以前という状況を考えると、選挙の具体的な方法を明確に語る「洋学者」として、イングの存在が浮かび上がる可能性も、まったく否定することはできないと思われる。いずれにしても、イングの寄贈したクシングとシェパードの本は、イングがこの地方の政治思想風土形成にも影響力を持っていたことを、今に伝える一つの証拠ではないかと考えられよう。

おわりに一洋書が物語る地方の近代

これまで述べてきたように、明治期東奥義塾関連洋書は、さまざまなことを伝えていると思われる。特に蔵書印や寄贈サインなどは、この地方がどのような本を必要とし、学んできたかを示す手がかりである。弘前藩学校時代に蘭学から始まった津軽の洋学は、さまざまな洋書を使うことで展開した。明治以降の洋学導入の中心となったのは東奥義塾だが、本稿で述べたようなパーレーの万国史の存在と成田らくのノートは、東奥義塾以外にも洋学を学ぶルートが津軽地方に存在したことを示している。それは、この地方の文明開化や洋学の広がりだけではなく、女子教育の水準をも教えてくれるものでもある。

東奥義塾関連洋書の中でも、イングの寄贈書は近代化への要求と相まって興味深いものである。以前、イングがこの地方に伝えた「文学社会」という弁論を鍛える形態が東奥義塾を中心として展開した自由民権運動に影響を与えたのではないかと指摘したが⁽⁴⁴⁾、本稿で取上げた書籍類もそうした視点を裏付けていると思われる。さらにこうした洋書類を伝えたイングは、おぼろげながらも浮かび上がるその活動範囲を見ると、たんなる東奥義塾という学校の教師や宣教師というよりは、彼自身が身に付けてきた西洋型知識や文化の導入者として位置づけるべき人間であり、仮にこれまで表に出てこなかったにしても、この地方の近代化の根本的な部分でそれなりの影響力をもっていたと考えられる。そういう点から見ると、彼が残した地学と政治の本は、あるいは近代黎明期にあったこの地方の、洋学への要求を象徴しているものかもしれない。

よく知られているように、津軽地方近代化の過程において、自由民権運動や地域開発に向けた取り組みなどさまざまな動きが起こった。ともするとこの地方だけの狭い枠の中で考えられがちであったこれらの事柄の中で、自由民権運動や弘前事件は政府の意向もからんだ全国的視野でみるべき現象であったことが、河西英通氏によって指摘されている。これにくわえて、表に明確には出てこないにしても、こうした諸活動の必要な知識の源泉の一つとして陰に陽にイングもかかわったとなると、津軽

地方の近代化もさらなる広がりをもって見えてくると思われる。即ち、イングを送りだしたアメリカのキリスト教伝播の意図が結果的にそれなりの効果をもたらしたということであり、当時としては日本の辺境に位置した弘前も、実は国際的な文化交流の一環に位置づいていたということである。そしてそれは同時に、文明開化期に日本にやって来た宣教師たちが、文化の伝達人でもあったことを鮮やかに示す典型的なケースでもあったと思われる。現在東奥義塾に残されている洋書類は、こうした背景を物語っていると思われるのである。

註

- (1) 坂井達郎「幕末・明治初年の弘前藩と慶應義塾―「江戸日記」を史料として―」『近代日本研究』第10巻（慶應義塾福沢センター、1993）参照。
- (2) 拙著『洋学受容と地方の近代』（岩田書院、2002）参照。
- (3) たとえば、明治21年に入学した佐藤紅緑は英語で苦勞したことを次のように書き残している。
 僕の幼さい時には英語熱が非常に熾であつた時で、僕の如きは郷里の東奥義塾で十四歳の時にスウィントンの万国史、ロスコーの化学、スチュワードの物理、クライヴ傳などを一度に注ぎ込まれた、小学校を出てから一年や二年でこれだけの英書が読めべき筈がない、僕は今でも読めまいと思ふ。恥かしい話だが僕は中学校を出てから英文の書は何にも読めなかつた（川澄哲夫編 鈴木孝夫監修『資料日本英学史2 英語教育論争史』大修館書店、1978、pp.330-332）
- (4) （前略）東京へ出て来て試験を受けたが、原語で知つてゐたが名称が分らぬので全然書けなかつた。物その物が分らぬのでなく名称がわからぬのだつた。（「明治二十年代の話」『東奥義塾再興十年史』回顧録、東奥義塾校友会、1931、p.49）
- (5) ジョン・イング（John Ing 1840-1920）は、アメリカ、イリノイ州出身。宣教師の息子として生まれ、一度軍隊に入った後にインディアナ・アズベリー大学で学び、メソジスト派宣教師として中国での布教活動を経て来日、1874年末から1878年3月まで東奥義塾に在職した。
- (6) 池田哲郎「津軽の英学―弘前東奥義塾を巡る明治初年の英学―」『福島大学学芸学部論集』（第15号―2、福島大学、1969、pp.39-55）なお、この報告は、全国にわたる他の旧洋学校所蔵洋書調査とともに、池田哲郎『日本英学風土記』（篠崎書林、1979）に所収されている。
- (7) このときの調査報告は前掲拙著に付録として掲載した。
- (8) ただし、この分類は英書のみである。他に、東奥義塾本に蘭書が6冊、仏書が5冊、ギリシャ語が1冊残されている。
- (9) この冊数のうち、東奥義塾本は213冊、弘前図書館本は54冊である。2004年夏に調査した弘前図書館本は78冊であるが、そのうち、国内で教科書として刊行されたものは洋書と見なさず、この分類から外した。また、明治期の洋書であっても東奥義塾所蔵印が一つも付いていない本も含まない。
- (10) これについては、拙著『洋学受容と地方の近代』第3章参照。
- (11) 岩川友太郎『二村居士の過去六十年 追想録及び官歴』（1935、岩川信夫）p.21。
- (12) 地理書については、本のタイトルは確認できないが、慶應年間に藩によって購入されたことが前出の坂井達郎によって明らかにされている（前掲坂井論文、p.214）。
- (13) そのうちの一冊は、次のべるパーレーの万国史で、東奥義塾の所蔵印がない珍しいケースである。
 東奥義塾で使用されていないものと思われるが、藩学校時代の購入とおもわれるため、この中に加えた。
- (14) パーレーの万国史についての詳細は阿野文朗『『パーレー万国史』と文明開化』阿野文朗編『アメリカ

- 文化のホログラム』(松柏社、1999、pp.5-14) 参照のこと。
- (15) これらの記述は、成田らく自筆の履歴書による。
- (16) 『弘前女学校歴史』(弘前女学校、1927) p.26。
- (17) 成田らく関連史料は、筆者が1999年度青森県女性問題調査研究委託事業を受けて調査した際に、らくの子孫である成田孝氏、田中淑子氏の協力を得て見いだしたものである。資料の概要は、青森県女性のあゆみとくらし研究会会報「あゆみとくらし」3号(2000) p.3に拙稿「調査報告 成田らくの資料について—明治前期女子教育普及に関連して—」として報告した。また、『青森県史 資料編』近現代1(青森県、2002) グラビア p.14に師範学校卒業証書、p.751にらくの残した婦人演説会に関する史料が掲載されている。なお、成田らくの資料に関連する論文としては、安田寛・北原かな子「弘前女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』82号、(弘前大学教育学部、1999) pp.87-85、拙稿「明治期津軽地方における唱歌の普及—地方への唱歌普及の一例として—」安田寛編『原典による近代唱歌集成 誕生・変遷・伝播』(ビクターエンタテインメント、2000) pp.198-205、河西英通「民衆空間としての劇場」『青森県史研究』第5号、(青森県、2000) pp.24-39、などがある。
- (18) 『弘前女学校歴史』(弘前女学校、1927) pp.6-8。
- (19) 'Miss Hewett's Report' *Minutes of the Fourth Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan*, Methodist Episcopal Church, 1887, p.19.
- (20) 'Girl's school' *Minutes of the Sixth Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan*, Methodist Episcopal Church, 1889, p.29.
- (21) 『弘前女学校歴史』(弘前女学校、1927) pp.22-23。
- (22) 'Woman's Work' *Minutes of the Sixth Session of the Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan*, Methodist Episcopal Church, 1889, p.31.
- (23) 詳細は、拙著『洋学受容と地方の近代』(岩田書院、2002) pp.94-95参照のこと。
- (24) 拙著『洋学受容と地方の近代』(岩田書院、2002) pp.95-97。
- (25) 明治九年六月十七日 宮館村領の内紺青色之如き土の出る処有是珍敷一品土倅[介一郎]等兼々分析用方可有之歟と申居たり(中略) 今度青森江御巡幸之節北岡博覧会相開候と申ニ付可差出心得ニて大道寺区長北岡有格義塾教師米人エング夫婦其外生徒等実地踏査の為め同村江来れり(「津軽長尾日記抄」市立函館図書館所蔵史料)
- (26) 'Luther Stearns Cushing', <http://famousamericans.net/lutherstearnscushing/>, *Edited Appletons Encyclopedia*, Copyright © 2001 VirtualologyTM.
- (27) 'Furman Sheppard', <http://famousamericans.net/furmansheppard/>, *Edited Appletons Encyclopedia*, Copyright © 2001 VirtualologyTM.
- (28) 池田哲郎『日本英学風土記』篠崎書林、1979。
- (29) この農学校時代の所蔵目録については、明治9年より明治40年までの蒐集蔵書約13000冊について目録が完備しており、北海道大学図書館の検索機能で検索可能である。
- (30) これらの内容については、『青森県史 資料編』近現代1(青森県、2002)第五章参照。
- (31) 『青森県史 資料編』近現代1(青森県、2002) p.303。
- (32) 『青森県史 資料編』近現代1(青森県、2002) p.321。
- (33) 『青森県史 資料編』近現代1(青森県、2002) pp.302-303。
- (34) Here I can not keep from expressing the sentiment of my boy-hood. In the convention of the leading men of my state, gathered to discuss the circulating petition, my father was the president, and Mr. Honda

the vice-president. One evening my father took me to the convention. I went taking in one hand a lantern, according to our custom, and in the other the hand of my father. I was thirteen years old. I did not know how the proceedings were being conducted. But when I heard that sweetest name for which the convention assembled; that noblest name for which thousands of people have suffered martyrdom, since the world began; that most precious name for which American revolutionary fathers shed their sacred blood and upon which the glorious Union stands-the name of constitutional liberty; my heart leaped with joy, gladness and hope, and was burned by the flaming excitement of the grant men assembled. That very night the convention resolved to make the petition, which was granted, as I said before.

De Pauw Adz, Vol I-No.14, May 4, 1889. (A Fortnightly Journal, published under the contral of the DePauw Literary Association)

- (35) 杉森文雄『青森県総覧』（東奥日報社、1928）p.48。
- (36) 『青森県史 資料編』近現代1（青森県、2002）pp.334-335、なお、p.297-301の解説も参照のこと。
- (37) ロバート・F. カール（Robert F. Kerr）Memorandum of Events in the Life of Robt. F. Kerr の1880年2月と3月の部分より。デポー大学所蔵資料。
- (38) 『東奥義塾再興十年史』（東奥義塾学友会、1931）p.37。
- (39) 外崎覚「東奥義塾教頭時代まで」（『陸奥の友』第2巻第7号）p.29。
- (40) 『東奥義塾再興十年史』回顧録（東奥義塾学友会、1931）p.6。
- (41) 「議員選挙者ニ告グ」明治13年2月6日付『青森新聞』154号。この中に、外崎覚による記事として、次のように出てくる。小川涉氏彼ノ米州殷克氏〔イングのこと〕ノ語ヲ録シテ以テ廣ク吾好利社會ノ兄弟ニ告ク其語ニ云吾米國ノ青年生力常ニ第一主眼トナス所ハ成業ノ后議員ニ列シ大統領ヲ選挙スル必ズ其人ヲ謬ラサルノ智識ニ至ルヲ期スルノミト予之ヲ誦スル毎ニ覺ヘズ感涙淋然トシテ下ル..（以下略）尚、拙著『洋学受容と地方の近代』（岩田書院、2002）pp.110-114、本多繁「明治初期における東奥義塾の意義」（『宣教研究』No. 3、日本基督教団宣教研究所、1968）p.145参照。
- (42) 「笹森儀助雑綴」第十二冊、頁数の記載なし。（弘前市立図書館所蔵資料）。この「重複選挙法」関係の内容及び資料の所在は、東奥日報社の松田修一氏よりご教示いただいた。尚、2004年7月31日および7月24日付東奥日報を参照のこと。
- (43) 飯田巽『津軽承昭公伝』（津軽承昭公伝刊行会、1975）pp.17-18に当時の遊学生の修学内容が書かれている。また、坂井達郎も、幕末弘前藩の遊学生は軍事、医学、語学が多かったことが指摘されている。（前掲坂井論文、p.199）
- (44) 前掲拙著『洋学受容と地方の近代』第3章参照のこと。
- (45) 河西英通『近代日本の地域思想』（窓社、1996）第一章参照。

（きたはら・かなこ 秋田桂城短期大学非常勤講師）